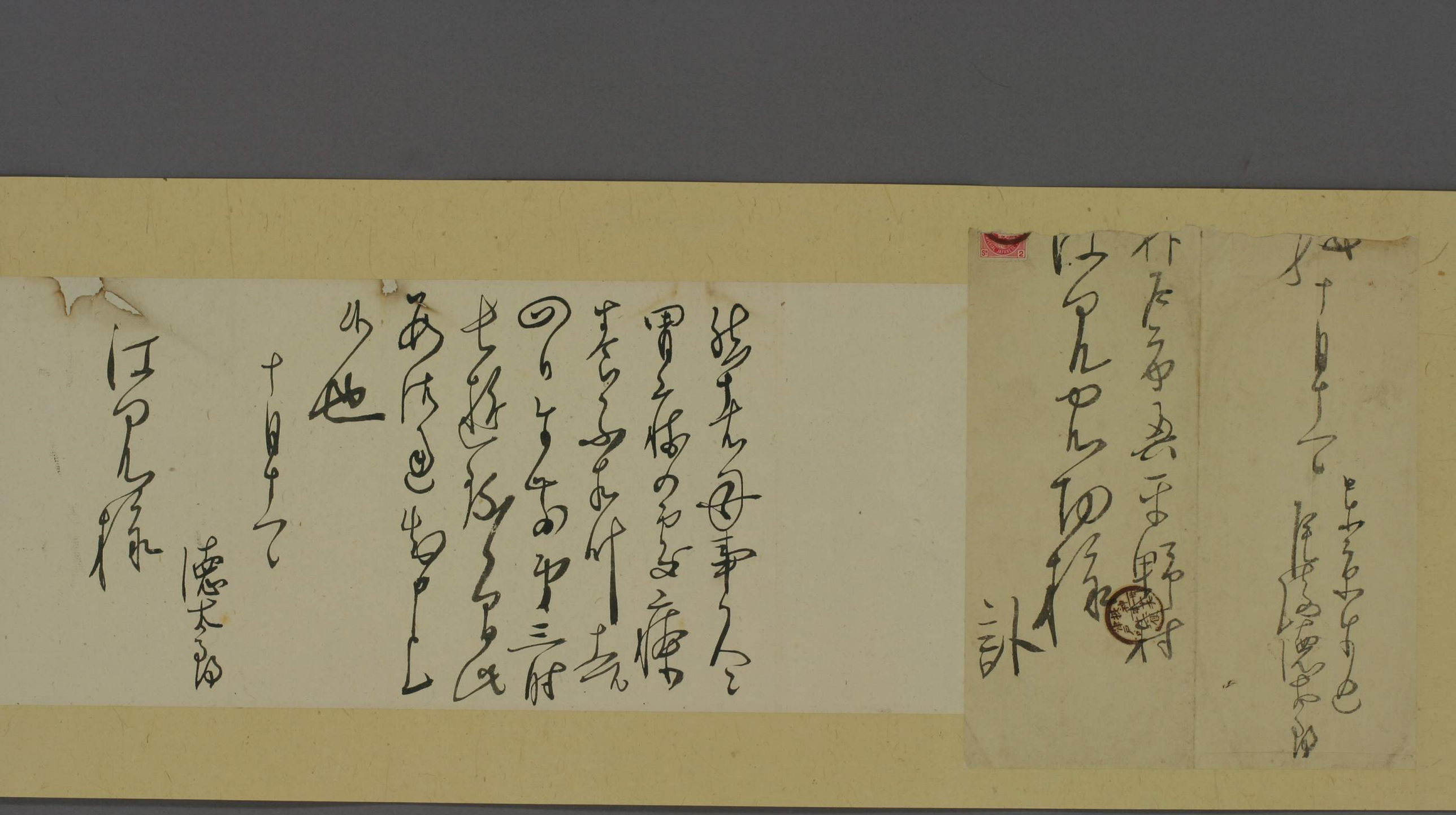
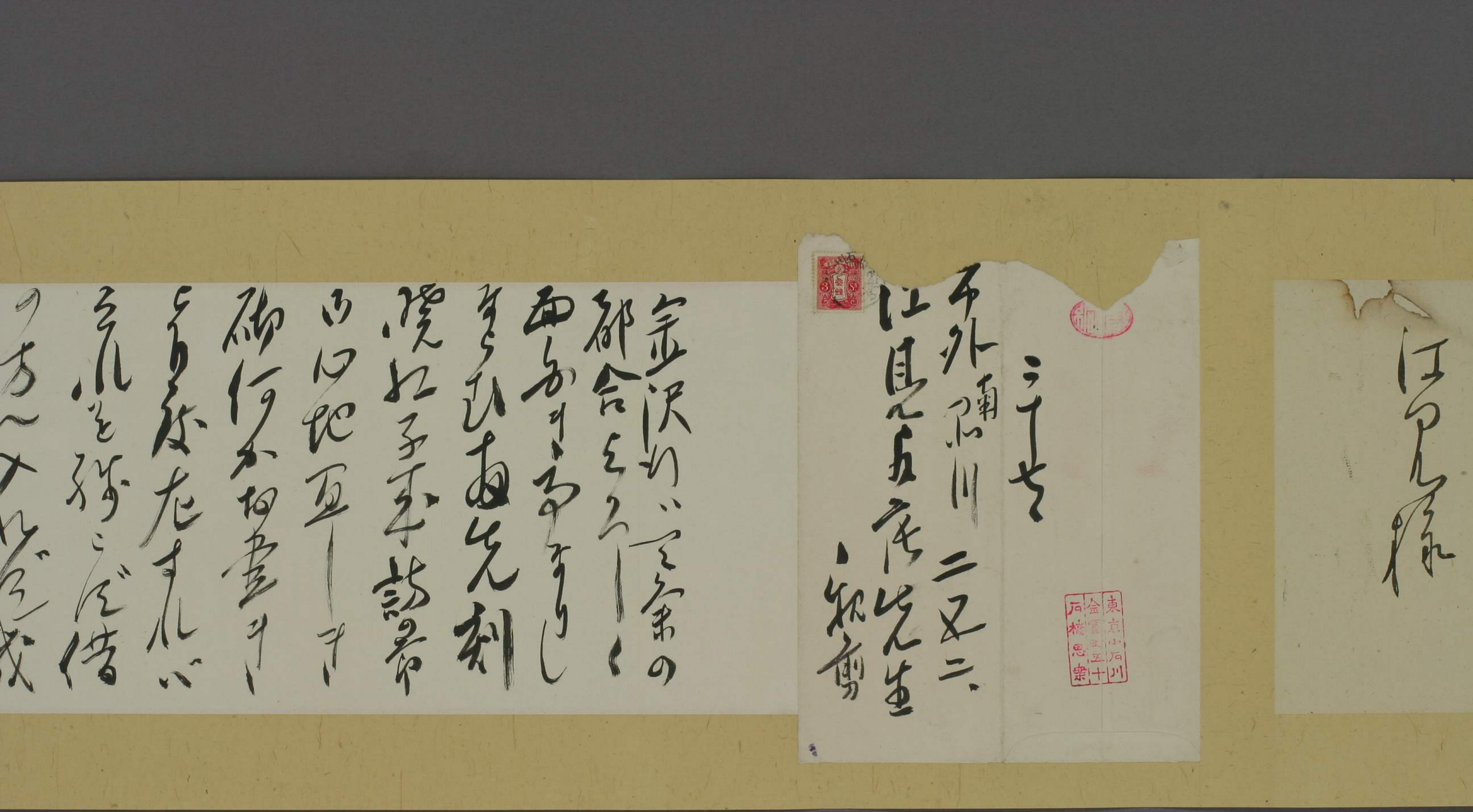
4422
昭和十年五月二九日受入





東京小石川
金壹圓五十
石橋思案

御何分相叶申候
候ハゝ左すれハ
之れを殊ニ御借
の方へ大切に哉
分可既存申候
一節ハ何卒
此両を済すよの
二三度何れにて
事ニ候ハゝ合ひ
ニて何かに存候
下たしよろしく
例の金額を記
さ候ハゝ受取り様
返濟致度存
以 先中御覧置し
度ことに御申上一
千七　恩生
永原大兄

先頃ハ病気御見舞
も不申候ハ日を追
ふて全く快方ニ赴き
ひ申と欣喜罷在候
御依頼の件早速神戸
の春国方へ問合せ申候
同人宋来の事とて多
忙の為め只今漸く返
事参りしまた記
一筆

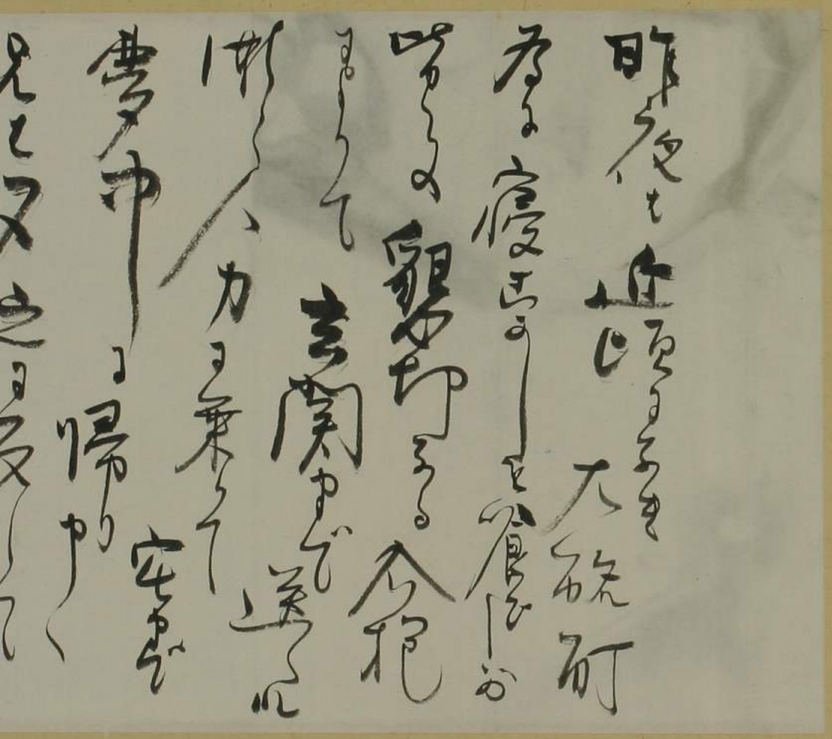
府下品川二五二
江見水蔭先生

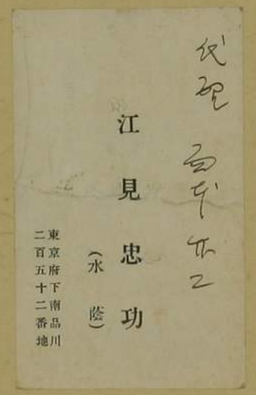
十二月二十日

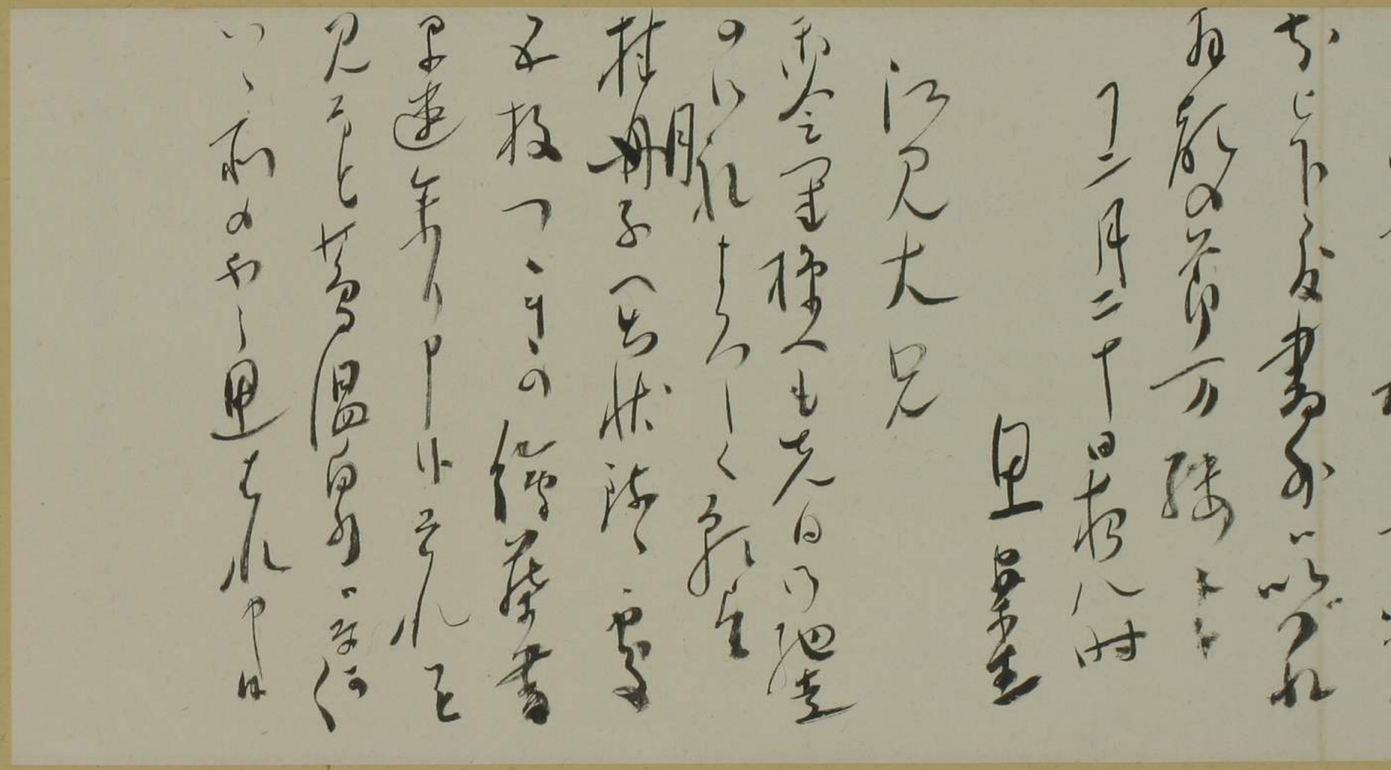
東京小石川
金富町五十
石橋思案

十七　思案
水蔭大兄

此の御書は御遠
事年月は未だ記
し難し
俳句は雄かよ更り
また代筆で御礼判
の代人で本人の現印
引接と支拂つて来ました
支拂は代筆でした
また手紙は僧の同旅
を依つて入会した人
行きたが其の人名
能く知りません
同旅の責任上能く調べ
ておき遠方を所ます
遠方は直接先生
りの照会も行きました
まだ阪本は直接
来ませんでしたが
からコンナ方法でしたが
相互は連絡
とアレ書は出来ません
ちと下会費
お願の為ッ陸上
十二月二十日 日蓮宗

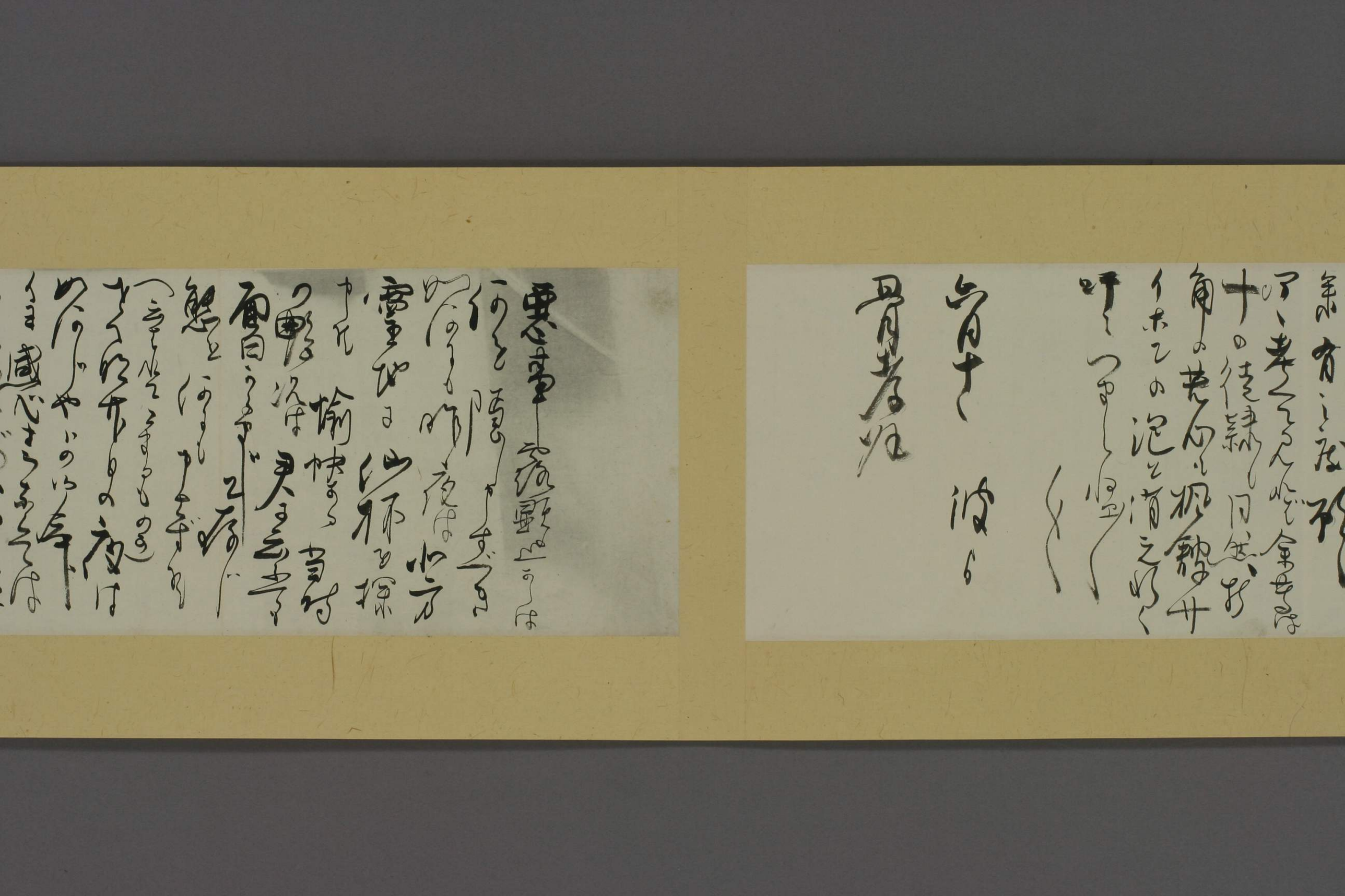



江見忠功
東京府下南品川
二百五十二番地



江見忠功
（永蔭）
東京府下南品川
二百五十二番地

昨夜も遅くまで大祓所
方々寝ぶるを食ひ
時々の翻訳する今朝
まで来て遅れ
関東
帰ハ力ゝ来て
書中ニ帰り
安堵
えと又之ニ
例ニ不眠病ニ
ゆゝしき事
のとき今朝
さう思ひ
又屋ニ
論ニ
まぬと田町ニ
例ニ頃ニ
ぬ事ニ
年ニ
ぬ事ニ節
例（十）の帳面ニ
条ニ
ぬ、孝ニ
十の往来ニ
角ニ



一言ハ之をまとむるもの(す)
きのふまでの夜は
めでたやかのいはれ下
往感じさらふるは
あまりはげしく寒は
書たるも野心
此方の待び出でて
思ひやるよしなれど
意気軒昂人をぶ落
自ら好都合なり
而して言人自らをやく
一件も秀で入
同人も同様なる謹言
然るに男出でて一生無ぬ
などひよりすると例の通
ぶうらく押掛けを
さはうし
然可成隠謀を
めぐらしもうちゆ
ぬしぬ 仲介
伊勢屋は猪の肉
御存じの松前公
さりとてはまた知らず
ためしもなしよう 鶴書堂
加盟とやめて
今日兩三度
では直して同伴させ
いよいよ位の高
あれども決して元の如く
ぬるまゆ

[illegible]

今日西京より御出也

之は直ニ同伴させ

申候位の處様子

候ども決して元の處へ

ぬことなり

御無事相成候はゞ

引きまで　皆様

新手も同しく

拙者の手付まで　御座候

よろしく御頼み申上

那かし　やス然一

まるで両者　、

思召すよう位せめて

研付け参ず候

ぬほかれ様

ここここ

2ノルルル

此表々　操ぞ

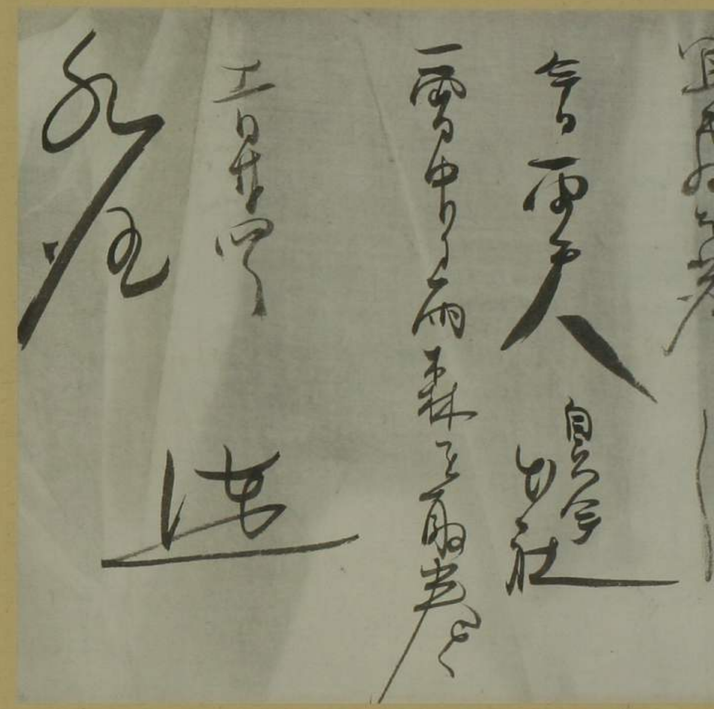
六月十九　小松

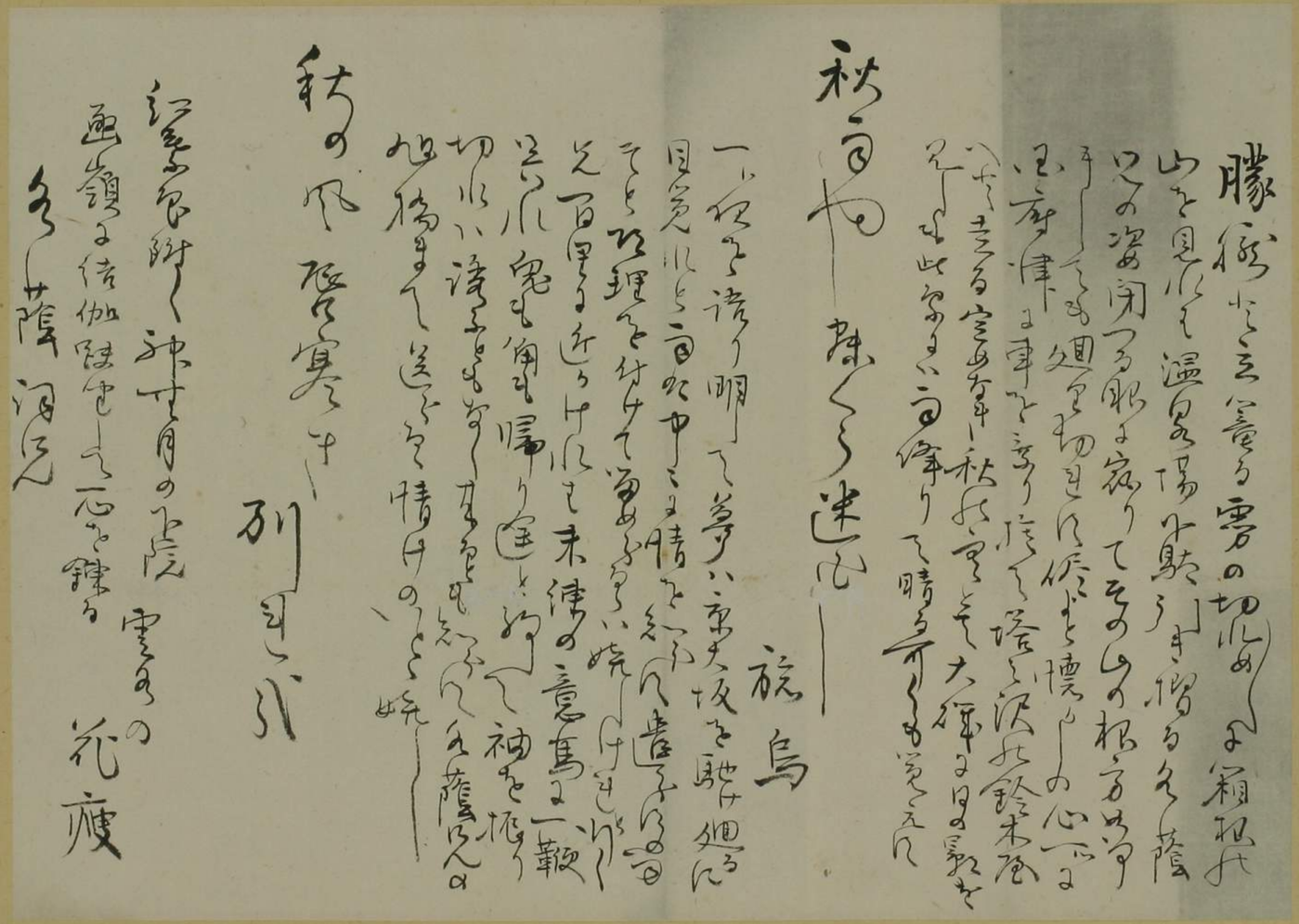
[illegible]

和卯 敬 慶應〔?〕の先生

和印敬蔵自伴の失策
男子ならばこそ 是ある[illegible]
然り仮名[illegible] 付[illegible]
[illegible]是れ[illegible]
鬼も角[illegible]は
味噌をつけたる 衛の尾[illegible]
荷担する印 ア[illegible]
こういう事[illegible]
[illegible]一ツ[illegible]
あげやる[illegible] 実は[illegible]花[illegible]
子[illegible] 男の[illegible]
[illegible] 男子[illegible]
[illegible] 不精[illegible]
[illegible] 森[illegible]
基[illegible] 祇園[illegible]
の[illegible]
[illegible] 女[illegible]
温[illegible]掛[illegible]
是[illegible]柳[illegible]
[illegible] 大
[illegible]掛[illegible] 例のテンツ
[illegible] 又[illegible]
[illegible] 之
是[illegible]
十三[illegible]
[illegible]
[illegible]

法様の気に入れば 出精之
是はどうしても江戸の方で
十三せ此名より 晋撰人あれば
何するはえ上の廿(わざとる事い)
場中まで 万々 筆形を発
又ろう、[redacted]（倒）ろうて
例の術を 行ふんまで一の心まで
言語ふ文の国里あ勇 驥
馬の 千里の 脚(デハない脚の)を
現すまで よしそ
すれば為筆の事はすかしれ
住手花腰 てまして下され
かく何もの思ふ筆事と存ずる
あるべし
割封の件 先刻は承知、
仕 樺井の 順慶人、
罷出はいたしまんもの
差別付も なく、只運こ
せんい、やりはやすろし 端書
一枚、 筆で代りをかえ
恨みをこえ 笑れし、
比無要の帰子より草市
取ます、 眠まで擬 風顰
且は お気に
仮名 人 魯文
一昨日 雨来 森下 窟





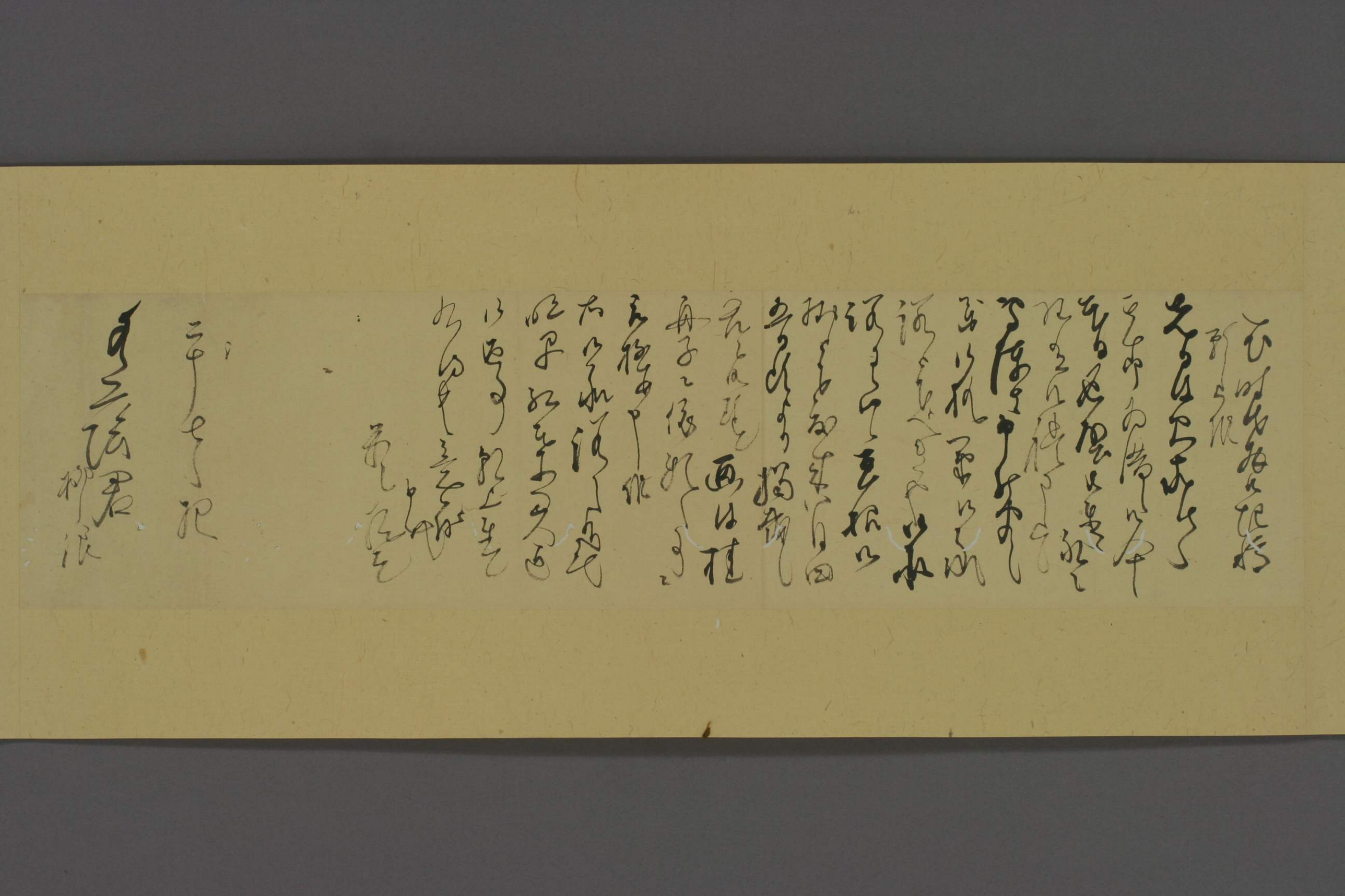
朦朧

秋夜

旅烏

別れ

花渡



常々道を説く時
者は悟りとして常
て思を忘ずる時者原
思ふとしてすべき悟
や悟の真の誤ふべ
き思ひつまりたる
ものなれば悟ずべき故ふ
就中意をしりえて真の
解せざる故ふ悟ずる
ゝ故ふ月下ふくものの形と
面わり〻宝真と実ふ
ることふそもそも悟の極
は悟とふ文字を無すす
わりの真の義は思ひ
心を限すふ故ふ解く
泳ぐものは泳ぐとふ
ことを用ひざるが故ふ溺れ
ざれば解く乗るものは
乗るとふ信をなさざるが
故ふ落ちざれば悟をなさず
始めて真の悟をは思を離
れて始めて真の意ふ
達す悟とふ文字の

始めて真の語を以て語を離れて語始めて真の意に達す語とは文字なり好人同じく迷を示す字なり人同じく迷を示す字なり人同じく迷を示す字なり人同じく迷を示す字なり

希くば千語を捨てて千意を高ぶる勿れ千意を捨てて語の根源を尋ねよ

茶の味は真の味なり時流の語を語り時流の語を思ふは玄関に立つて入らざるものなり此禅を下ぬと真の根と云ふ通く徒に頭をぶつけて病をます

なぐさめ座右に置く言葉

[redacted]時禅師再ふ讃づくり参るなり十二月ふ参る

難

蓋とて真しらのふ

てふの好漢の真人ずる所

ふめぐば蓋と取つて御座

決香を禅くるい

来りなんとてモレ

さらばねへら

月山

月三

遺憾！畢生の遺憾なり

遺憾！畢生の遺憾なり

これか、一月二日の拂曉、箱根塔

の澤鈴木茂前を過きし

ものと、蘆叢蕭々、と

ぼりて、渓流の岸に臨

みしまと、帰りて、今三日、

之年一に君を待てしあり

わば、本奥生、得意が

ほに主人先を報

告、き遺憾、り知少

なるやうなるもの、一巻

二泊、大に語り、大に飲み、

大き食し、快絶奇絶の旅

りしなり一きに、鉢

盡きて江の島を見捨て帰

らんとせしに、うれのみは

山岡の旅り中き畢生の

憾事！

畫きて江の島を見捨て帰
らんとするよりしに、えもいはぬ
山風の旅心中を畢生の
感事！

註、生等は房総の遊を白浜にてきらんとし、
北條より浅野浦賀に航し、横須賀より
汽車にて国府津に着、一泊、廿日、熱海
三入り、廿一日沼津に、一日書を認して日金、
箱根の険を超え、伊豆、大仏景、円日
山等、湯島景を眺し、翌二日出
原より下りしより、中途旅賃畫を毎人と
共、疲れも箱根を府津にて馬車にのり
得ず、苦心相慮、ようやく新橋に達する
得き、所々、
早く帰の事れ、箱根の山寒し
て長くとどまるべかりき、
元

早く帰郷
て。長くとゞまるべかゝ
元
丈
秀康